



2024. 12

漢方医学センター
一木 昭人

血栓止血領域の過多月経への漢方使用

私は主に出血性疾患や血栓性疾患などの血栓止血領域に関わっています。大まかにいうと、出血性疾患は血液が固まりにくく、出血してしまった際に止血しづらい患者さん、血栓性疾患は血液が固まりやすく、深部静脈血栓症や肺塞栓などの血栓症予防のため抗凝固薬（血液を固まりにくくする薬）を内服していることが多い患者さんです。

最近、血栓止血領域でも月経関連のことが話題になっています。そもそも女性は月経の対応が大変なところから出血性疾患、血栓性疾患があるため更に出血量が多くなってしまい困ってしまう患者さんが多いです。

血液凝固に関係なく、まずは婦人科で子宮筋腫や子宮内膜症などの器質的疾患がないか確認していただくことが重要です。ただ、器質的疾患がなかった場合でも、特に血栓性素因がある患者さんは抗凝固薬を止めることは出来ません。婦人科領域でホルモン剤を使用することもあります。嘔気や頭痛などの副作用でうまくいかないこともあります。

このような際に漢方が役に立つことが多いです。むしろ内科医が漢方以外で対応できることは殆どありません。

桂枝茯苓丸、当帰芍薬散、加味逍遥散といった婦人科三大処方を用いることが多いです。自分は出血性素因や血栓性素因がある患者さんの過多月経に対し桂枝茯苓丸を度々用いています。

桂枝茯苓丸の原典は『金匱要略』婦人妊娠病篇です。その中に、癥病（ちょうびょう、子宮筋腫のようなもの）のある婦人のだらだらと出血が続くときに桂枝茯苓丸で治療する、とあります。血栓止血領域の患者さんの続いてしまう過多月経に対し桂枝茯苓丸を使用し、月経量が改善した例を経験しています。

月経のことを人と話したり、他の人と出血量を比較したりすることは恐らく殆ど無いため、実は過多月経で困っている人は意外に多いと思われます。血液素因の有無にかかわらず、まずは当センターを含め漢方に詳しい医師に相談してみるといいと思います。自分では普通と思って我慢していたことが漢方の内服で改善するかもしれません。

また逆に、過多月経を契機に出血性素因が分かることもあります。やはり一度は医師に相談していただくのがいいと思います。